

西田哲学会会報

第二十号

題字 上田閑照

発行・西田哲学会

〒九二九-1126

石川県かほく市内日角井一番地

石川県西田幾多郎記念哲学館内

電話(〇七六)二八三六六〇〇

西田哲学会第二十回年次大会報告

秋 富 克 哉

令和四年七月二十三日(土)、二十四日(日)、東京大学駒場キャンパス(KONCEE East)を会場に、第二十回学術大会が、対面とオンライン併用のいわゆるハイブリッド形式で開催された。コロナ禍で二回続けてオンライン開催だったため、三年ぶりに対面が実施されたことを一会員として素直に喜ぶとともに、開催校の張政遠先生以下スタッフ諸氏への感謝を以て、大会の報告をさせていただきます。

公開講演

初日午後、対面式で行われた公開講演は、ゴリラ研究の世界的第一人者、霊長類学と人類学専門の京都大学前総長、現在総合地球環境学研究所所長の山極壽一氏、そしてエックハルトを

中心にドイツ神秘主義研究で著名な早稲田大学名誉教授の田島照久氏という、異色の、しかもさわめて興味深い組み合わせのお二方によるものとなった。

山極氏の講演「今西錦司の思想に西田哲学を見る」は、冒頭いきなり「哲学の力が今弱っているのではないか」という挑発的な問いかけから始まった。氏は、二十世紀以降の生命科学の進歩と情報通信革命、さらに進行中のコロナ禍についての現状認識を踏まえ、人類の進化過程について興味深い数字データを紹介しながら、文化という観点から、文化を社交と見なし社交を作るのは身体のリズムであるとする山崎正和の主張を援用しつつ、人間は五感で社会を作ってきたのであり、言葉に依るの

ではないと説かれる。そして、二元論的な近代西洋的パラダイムに行き詰まりを見出すオギユスタン・ベルクが、ユクスキュルの「環境」、西田の「場所」や和辻哲郎「風土」に着目していることをもとに、西田と今西の関係に向かわれた。

氏は、著作『生物の世界』で「すべての生物は社会を持つ」と主張する今西の基本的立場が、「生命が環境を変え、環境が生命を変え」として「行為的直観」を軸に歴史的世界の自己形成を述べた西田の思想を自然の世界で実証しようとしたものだったのではないかとされる。両者には、自然や生命の本質をめぐる、見えないものとして隠れているがら内と外をつなぐ「場所」や「間」への着目という共通項が

あり、今西の「棲み分け」もその立場に他ならない。

氏は、日本文化が培ってきた伝統に、二つのものに対し、どちらでもなくどちらでもある構造を見る「容中律」の立場、そして自然(動物)と人間の連続性を見る着想を認められる。さらに、今西の二人の代表的な弟子、伊谷純一郎と梅棹忠夫とがそれぞれ「文化」と「文明」に着目したことを紹介しながら、人間の本質は共食と共同保育を通じて高めた共感性が元になっていることをもう一度確認すべきだし、環境を対象としてではなく主体との関係で眺める立場から、文化と環境が共鳴し合う

環境倫理が求められると締めくくられた。

続いて田島氏は、「西田の「場所論」とエックハルトの「本質的始原論」——「万有在神論」(Pantheismus)の観点から」と題し、西田が論文「場所的論理と宗教的世界観」で自らの立場を万有在神教(汎神論)的ではなく万有在神論的としたことを受け、エックハルトと西田に共通する思想的特質を「万有在神論」の観点から探ることを主眼とされた。そこで、まずは「万有在神教」について、この用語を



初めて用いたとされるトールランド、トールランドに影響を与えたブルーノ、「汎神論論争」を展開したレッシング、「万有内在神論」を命名したクラウゼの立場をそれぞれ紹介、とりわけブルーノが、「無限球」に比せられる「宇宙の無限」に対し、「神の無限」について、神は内在する一切のものなかに全的に内在するところとして「万有内在神論」の特徴を確認された。

そのうえで西田の「万有内在神論」性格を場所的論理の中に探るため、論考「場所」から



「一般者の自覚的体系」への展開を考察され、場所の立場における「超越」と包摂判断の「包摂」とが万有在神論の主要契機だとされ、「無限球」の比喩で語られる「絶対現在の自己限定」としての「歴史的世界」を検討された。

ただし、田島氏は、「無限球」に比せられる世界が「全体的」「神」「絶対現在」と同

定されるかぎり、それは汎神論的構造を持つことになるのではないかと問われる。さらに「逆対応」において神と自己が対するとされるところ、場所的論理による哲学的立場が宗教的内容に転調しており、哲学と宗教の関係が問題として残るのではないかと指摘された。

個人研究発表

初日の午前中に三名の研究発表が行われた。

まず、邱奕菲氏(立正大学)「和辻哲郎における「間柄」と前期西田哲学との接点——「意志の統一」を手がかりにして」は、表題の課題を、和辻の長編論文「倫理学——人間の学としての倫理学の意義及び方法」をもとに考察、「善の研究」における「意識の統一」としての「意志」、さらに『自覚に於ける直観と反省』における「絶対自由の意志」との連関を検討した。

続く真田萌依氏(京都大学)「西田前期哲学における「意志」と「身体」——「純粹経験」から「自覚」にかけて」も、西田哲学における「意志」に着目、「純粹経験」から「自覚」に至る過程でのその位置づけを考察し、中期以降の「行為」概念を見通しつつ、前期においては必ずしも主題化されていない「身体」の位置と可能性を探ること

を試みた。

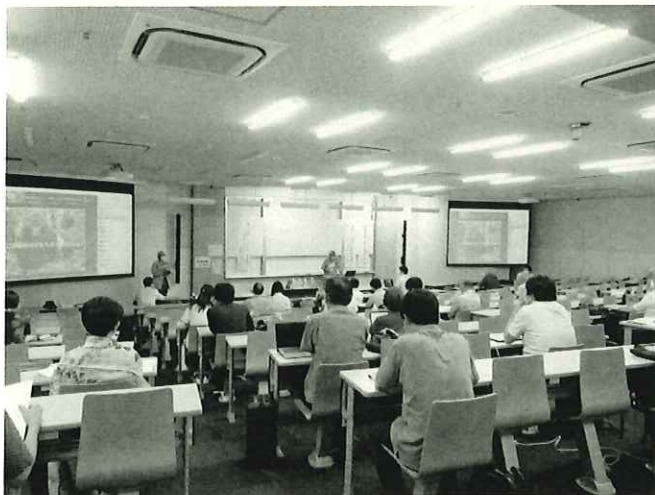
最後に新井潤氏(立正大学)「身体から自己の自覚へ——『自

覚に於ける直観と反省』における自覚的体系と意志」は、『善の研究』に残された課題としての、個別具体的な経験と哲学的体系との関係という問題を出発点に、『自覚に於ける直観と反省』において従来あまり顧みられていない「身体」に着目、「自覚」との連関を跡づけながら「身体」の意義を取り出した。

二日目は、二会場に分かれ、同時進行的に実施された。

第一会場で、猪ノ原次郎氏(北海道大学)「自覚が論理形式であるとは何事か?——西田幾多郎の実践的自己意識」は、西田における「自覚」を知識形式として受け止め、西田の探求の構造を「一般者の自己限定」に即して考察、判断的、自覚的、叙智的の各一般者相互の連関の捉え直しにも触れながら、西田哲学を「自己知」の哲学として明らかにした。

続いて保泉空氏(東北大学)「一九三〇年代の



思想史における三木清と「新しいヒューマニズム」は、三〇年代日本における「ヒューマニズム論」の流行と衰退を背景に、三木のヒューマニズム思想の特徴を、「危機」の洞察や西田からの影響に言及しつつ、「歴史における人間の行為」という観点から「外への超越(客観性)」と「内への統一(主観性)」の弁証法的統一として考察した。

最後に松本きみゑ氏(大阪大学)「西田幾多郎の場所のモノドロジー」は、『働くものから見るものへ』の「序」における「東

洋文化」理解を出発点に、「絶対無の場所」や「永遠の今」を考察しつつ、アリストテレス、プラティノス、アウグスティヌス、ライプニッツに対する西田の理解を突き合わせ、後年に至る「自覚」の位置づけを検討した。

第二会場では、二つの英語発表が行われた。まず、Steve LOFTS 氏（ウェスタンオンタリオ大学）「Nishida's 'Resolute Critique' (Philosophy) of Culture」は、文化に対する西田の立場を「文化の断固たる批判哲学」として押さえ、文化と哲学の関係を軸に西田の「歴史的世界の原型」や「原文化」などの思想、さらに「媒介の哲学」

という観点から自己と世界を媒介する「技術」や「言語」を考察し、最後に「無の文化」に基づく「世界的世界」の可能性に言及した。

続いて Sova P. K. CERDA 氏（京都大学）「The Conceptual and Normative Structure of Activity: Considering Nishida's Readings of Nishida and Aristotle」は、西谷啓治による西田とアリストテレスの読解から、「中動相」の働きや感覚におけるロゴスを考察、西田における「生命の捕捉」が「感覚の認識性」と「知性の認識性」の連続性を明らかにしようと指摘した。

『善の研究』からの展開

板橋 勇 仁

二日目の午後に「経験の〈場〉——『善の研究』からの展開」と題して開催された。現在の情勢に配慮し、会場参加式とオンライン式の併用で行った。司会

は本報告を執筆している板橋勇仁（立正大学）、提題者は板橋、铸件美佳氏（明星大学）、安部浩氏（京都大学）。

となった。その意図の下、「善の研究」では、「経験」が、いっさいの実在が（そこからそこへ）と展開するともいえるべき場として描き出されているという見立てから、「経験の〈場〉」というテーマが設定された。さらに、議論の焦点を「身体」に定めた。「善の研究」からの哲学の展開を、身体を焦点にして討議する試みは新鮮であり、かつ現代的な可能性を有するであろう。当日の各提題の概要を以下に記す。

板橋の提題は、「経験の場——

『善の研究』から歴史的な身体の「形」へ」と題して、『善の研究』で説かれる「経験」を、西田の講義ノートを元に、「一なる場」として考察した。すなわち、日々の経験は、主客が相互に開かれている（一なる場）がそれ全体として個性的で独創的な出来事を創造する「活動」それ自身である。ただし、この一なる場を生きたことは、自分を中心にして世界を統御しようとする「主観的自己」の「空想」の否定によって実現する。またそれが根本的に実現するのは「技芸」によつてではなく「宗教」的な経験によってである。西田は、そうした実現において「自己の身体」の活動が重要な役割を果たすとみなしているものの、立ち入った考察はない。それに対して、後期西田哲学では「身体」は「歴史的な身体」として詳しく主題化される。自己の身体が

成の現実における

存在者と主体としての自己とが直接に一の活動をなす制作的行為の中にある。それは、いまこの場の制作が、能く消滅して繰り返しや惰性に陥らない次の個性的な制作を呼び起こす限りにおいて成り立つが、このことは、我々の自己が現在のありようから自分自身で次の個性的な出来事を形作るうとする「我執」が否定されることである。この際、我々の自己の身体は、我執が否定されて自己と他者との連関を実現するその重心であり、この連関を表現する、社会に共同的な「形」である。しかし従来の西田解釈では、身体は自存する事実として理解されていなか。身体は息づかいや呼吸は、常に社会的であり、自己と他者との関係を重点的に表現している。我々の自己が身体に関わることは、自己と異他なる他者との関係の統御を否定させる関係に関わることであり、逆に、自己と他者との関係に関わり、異他なる他者その統御しえない異他性のままに、自らにおいて表現し、包含する「形」を問うことである。

铸件美佳氏の提題は、「稽古する身体と純粹経験」と題して、『善の研究』における「純粹経験」を、





稽古という文脈の中で考察した。『善の研究』において、純粹経験のあらわれは、なんらかの身体的技術それも訓練の果てに身についた技術を行使しているときに結びつけられている。『善の研究』では、技芸の習熟過程について、技芸の習得は意識的と無意識的の往復からなるという観点や、意味・判断も大いなる統一作用である観点から触れられている。また、いわゆる達人の領域について、無心の境地における「真に生きた芸術」という観点から触れられている。ただし、武芸における型稽古を参照すれば、それは、あらかじめ定められた動きを繰り返すことで、その武芸において基礎的な体の使い方を身につけ、さらには意識せずとも必要に応じて自由にわざを繰り出せるようになることを目指す稽古である。同じ動きを繰り返すこと自体が終わりなき鍛錬である。こうして型稽古には、意識的になることと無意識的になることの往来がある。しかしそれは単に往来しているだけではない。意識の統一範囲が深められていくという観点がある。そのためには、①姿勢(どのように立つか)の意味での「構え」を身につける、と同時に、②disposition(潜在的にどのように動くことができるか)の意味での「構え」を身につける稽古が必要である。つまり、意識的と無意識的を往復しながら、習慣を積極的に利用した蓄積が必要となる。西田が述べた「体系的発展」(第一章第一編)には、このことが含まれなければならない。またこのことが非熟練者と熟練者の違いを記述することを可能にする。ただその考察のためには後期における歴史性への考察を俵たなければならぬ。

安部氏の提題は、「心身土ーおこり・いきおい・いきあわせ」と題して、「経験の場」が、心から身へ、そして更には身から土へと漸次開かれ、拡大していく過程を経験の初発と爾後の進展(乃至は深化)として考察した。我々の経験の原初的な生起の有り様すなわち「経験のおこり」とは、自己が自己の意識を意識した利那の状態であり、またそのような経験のおこりがそこにおいて認められるような「経験の場」とは、「直接経験が私の「意識上に於ける事実の直覚」である以上、私の意識(心)である。そして直接経験の特徴は、その時々々の意識内容が緊密な統一の連関に齎される一方で、そのような連関が、「統一作用」によって更なる「体系的発展」を不断に遂げていく点にも求められる。『善の研究』では、私の意識の統一作用が、客観の総体である「自然」の統一力に合流することが説かれるが、その合流が私の身体において行われる以上、経験のいきおい(直接・純粹経験の統一作用)の生起の在処もまた、当の身体を措いて他にはない。さらに、各人が共に生きることを可能にするような直接経験の統一作用を「経験のいきあわせ」と呼ぶなら、西田の言う「社会的意識の統一力」の中にそれを認めうる。そ

うであるならば、△社会的意識の統一力(経験のいきあわせ)の場としての身体△といった発想もまた読み取られうるが、十分に提示されていない。ただし和辻哲郎の『倫理学』をはじめとした議論は、経験のいきあわせが生起する場が、身(肉体)から土(風土)へと伸展していくことを示唆する。ただし、そうした拡大の所以について、和辻の説明は無い。そこで西谷啓治の身土論を手掛かりにすれば、この人間社会における生き合わせは、「いわゆる人間の仕業」というような事の領域ではな

いような処」から「生かされている」という事が成り立つ場」たる△土△を措いて他にはないことが明らかになる。

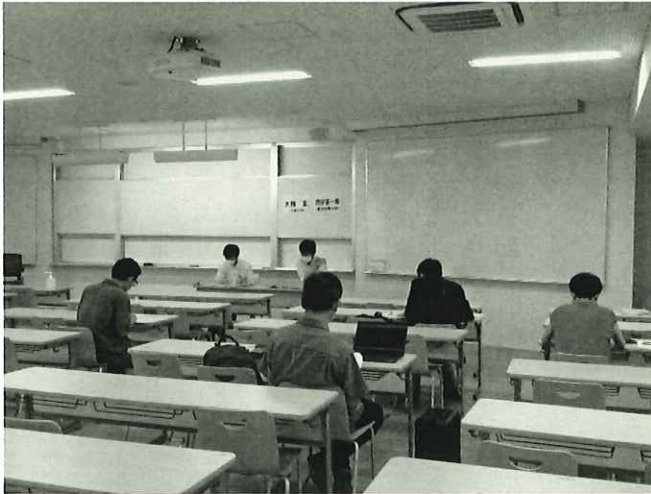
以上の提題のあと、休憩時間を利用して、会場とオンライン上で文面で質問を提出してもらい、質疑応答を行った。無意識と創造性、自然と歴史、身体と他関係などが議論になった。時間の都合上、すべての質問を取り上げることができなかったのは残念であった。終了後、会場では直接質疑が続いている様子も見られた。

『善の研究』 講演会報告

— 2 実在・8 自然 —

一日目の午前に開催の『善の研究』 講演会は、研究発表や講演会がハイブリッド(対面とオンライン)であったのに対し、対面のみで行われた。その日の東京の気温は朝からゆうに三十度を超え、茹だるような暑さのなか会場に足を運ぶ私は、オンラインを少しうらやましく思っていた。暑さのせいかわりなせいか、あるいは担当者のせいかわりなせいか、あるいは担当者のせい

か、感染対策として用意された広い会場には、ほんの少しの参加者しかいなかった。今回の講演箇所は第二編「実在」の第八章「自然」。担当者は私・大熊玄(立教大学)と、熊谷征一郎氏(亀田医療大学)である。二人で前半・後半の内容をそれぞれに解説して質問に回答するという近年の形式を踏襲し、大熊が前半を熊谷氏が後半を担当した。



まずは大熊が全体概要と前半の説明をした。この第八章「自然」は、第九章「精神」と対をなす章であり、テーマはひとことと言えば、いわゆる自然物にも実在としての「自己」(統一)がある、ということ。西田は、その自説を述べるため、いわゆる科学的な異説をくり返し登場させ批判するという形で論を進めていく。前章まで語り直した内容を自然物を中心に語り直しているのが重複も多く比較的読みやすい章だが、理解しづらいところもある。

「統一するもの」としての「自己」については説明が必要だ。西田は、第一段落末(一字下がり)で「それ故に自然には自己がない」とするが、第四段落では「自然もやはり一種の自己を具えている」と書く。同じ章の中で一見では矛盾することが述べられているようだが、これは「科学者」の主張・概念と西田自身の主張・概念が交差しているからだ。その概念がどの立場でどのような意味を含んでいるのか、ほぐしながら解説する必要があった。

この章での西田の主な対話相手は、いわゆる主観が除去された客観的自然物こそが実在であると考えた人たち(科学者)である。西田は、自然の本体を「未だ主客の分れざる直接経験の事実」と考え、単に客観的に扱われる自然は抽象的概念にすぎないと言う。そのためこの章の西田は、そうした「客」を重視する

対話相手を意識してか、「主客未分」よりも「主」を強調する記述が多い。

当日がせっかく猛暑日だったので、天気を例に考えてみた。私たちにとって真に実在としての天気は、天気図やネット予報でデータとして抽出された気温や気圧ではなく、ここで実際に直に経験している具体的なこの状況である。「茹だるような暑さ」という情緒的表現も、あるいは詩人による擬人的表現も、西田なら「実在の真実なる説明法」(第二編第三章)だと言ってくれらるだろう。

西田は、主観性を捨象し客観性を誇示する科学者の言う実在としての自然は、抽象的概念にすぎない、と言う。しかし対話上の役割のせいばかり強調されないが、逆に自然が客観性を除去されて主観的にだけ捉えられてしまえば、それもやはり極めて抽象的ということになる。第三章で称揚される擬人的表現も、その主観性だけが強調されれば、やはり「実在の真景」からは遠ざかる。ただ「茹だるような暑さ」と言うのではなく、数値も併せて知情意の合一するところに真の実在があるのだろう。

次に熊谷氏が後半を説明した。氏の説明は、図版入りの資料によって多くの具体例が提示され、いわゆる客観的説明だけではない、自身の解釈を基礎とした具体的なものだった。印象に残ったのは、その説明で何度も繰り返された「個性」をもつた「二つのもの」が「発現する」というフレーズだ。以下、当日の記憶と資料をもとに、氏の解説を簡単に振り返る。

「二つのもの」とは、西田の「統一的或者」や「統一作用」であり、ここでは「自己」とも呼ばれている。植物であれ、動物であれ、それらが持つさまざまな部位は、それぞれに「個性」を持ちつつ、その「二つのもの」が「発現」したものだ。この「二つのもの」の発現は、決して均一・没个性的ではなく、必ずそれぞれ個性を有している。そしてそれは、動植物の個体が有する部位にとどまらず、犬には猫とは異なった、バラにはヒマワリと異なった個性的な発現がある。鉱物では、水晶も(氏の挙げた例では)石榴石も方鉛鉱も、それぞれの形状で「二つのもの」として結晶化し、その個性が発現される。このように西田は、動物の身体や行動、植

物の形状や成長、鉱物の結晶化まで、すべて一貫して「個性」をもった「二つのもの」の「発現」として考える。そして鉱物や動植物のどれもが有するこの「個性をもった一つのもの」が「自己」と呼ばれるが、厳密には、この「自己」は単に「発現」するものではなく、「発現」するのを「自覚」しているものであり、それは「人間」の段階に至って初めて現れる、という。

また熊谷氏は、第六段落の一文「我々が能く動物の種々の機関および動作の本に横られる根本的意義を理会するのは、自分の情意を以て直にこれを直覚するので、自分に情意がなかったならば到底動物の根本的意義を理会する事はできぬ」という箇所を、さまざまな例で説明した(ここが一番おもしろかった)。驚がカーブした長い爪を有すること、子犬が大きな犬を見て震えること、赤玉が白玉にぶつかり動かすこと、赤ん坊が笑いこちらも笑うこと等である。たとえば、我を忘れて赤ん坊を見ていたとき、その赤ん坊のうれしさが自分のうれしさのように感じられる。それは、赤ん坊と自分が「融合」している状態、自分が赤ん坊に「なっている」状

態であり、純粹経験（直接経験）と呼ばれる。氏は、そのように互いの「本に横われる根本的意義」が「理会」されるのに必要な、主客ともにある「理」を、わかりやすく、（共感）（＝共鳴、シンクロ、同調、同感など）として説明した。

以上、担当者として大熊と熊谷氏による解説がなされ、それぞれに質問がなされた。その内容は割愛するが、情景だけでもお伝えすると、質問に対して担当者が答えるだけでなく、他の

エッセイ

宿題が残っていた

すっかり忘れていたが、私は西田哲学についての論文を若い頃に書いていた。大学院を出



参加者もいっしょに考えて説明をしてくれた。問う者・問われる者という二項対立ではなく、ともに西田の考えや概念について考察し意見を交わすという様子、いわゆるレクチャーではなく対話型のゼミのような雰囲気になったのは、担当者として嬉しく、学びの多い時間となった。そこには、オンラインでデジタルに抽象化されない、直接的で具体的な交流があったように思われた。

（大熊 玄）

氣多 雅子

て三年目、「西田哲学と禅」という論文を『理想』（一九八五年二月号）に寄稿していた。忘れていたのは、この頃

私は特に西田哲学を研究していたわけではなかったからである。何か西田について論文を書かないか、というお話を突然或る先生から頂いたに過ぎなかったのである。

大学院に入ってから、西田の著作は折に触れて読んでいた。しかし、読んでもほとんどわからなかった。目の前に立ち塞がるごつごつした岸壁のようで、取り付く島もない感じであった。わかりやすいエッセイから入っていいこうという発想はなく、結局途中で放り出すことになった。西田について書かないかと言われたとき、少しでもわかる場所があると思われたのは『善の研究』であり、当時関心をもっていたのは浄土教を中心とする仏教思想であったから、純粹経験と禅というテーマで書くことにした。いま読み返して見て、坐禅を「身体思惟」の方法と捉えている点が現在の自分の関心と共通していることに驚いている。

西田哲学と禅の関係については多くの研究がある。その手がかりとして誰もが注目するのは、西田が七十三歳のときに西谷啓治に宛てた手紙の一節である。「…背後に禅的なるものと云われるのは全くそうであり

ます。私は固より禅を知るものではないが元来人は禅というものを全く誤解して居るので、禅というものは真に現実把握を生命とするものではないかとおも

います。私はこんなこと不可能ではあるが何とかして哲学と結合したい。これが私の三十代からの念願で御座います」（旧版『西田幾多郎全集』第十九巻、二二四―二二五頁）。この一節が重要であることに異論はないが、私にとってはそれに劣らずその続きが重要であった。「併し君だからよいが普通無識の徒が私を禅などと云う場合、私は極力反対いたします。そんな人は禅も知らず、私の哲学も分らず、XとYと同じいと云って居るにすぎぬ。私の哲学を誤り禅を誤るものと思えますから、哲学の立場宗教の立場もこれからだんだん考えて行きたいと思えます」。

これはどういう意味だろうか。「君だからよいが」というのは、西谷のように禅がわかり

哲学がわかる人ならばよいということであろう。西谷のその後の仕事を見ると、確かに彼が禅も哲学も分かっていたことが分かる。禅と哲学の結合というならば、それは西田よりも西谷の仕事のなかに認めることができよう。西谷においては、禅と哲学の関係そのものが思索の主題となり、思索の場となっているように見える。西田はその結合

を自分はまだなし得ていないと考えているばかりか、不可能だとさえ思っている。これは西谷が西田のやり残した仕事をしたということではなく、西田と西谷は、禅と哲学の結合をそれぞれ自分のやり方で考えていたのではないかと思う。両者は相手と自分とは別の仕方と考えていることを知りながら、そしてそれぞれ自分の立場を動かさないものとしながら、相手の立場を認めている。そのように私には見える。さらに上田閑照先生の場合を加えて考えると、また面白い。上田先生の場合は、禅と哲学の関係をご自分の人生のなかから掴み出してくる。西谷よりさらに一歩、ご自身の生の現場に踏み込んで禅と哲学の関係を生きている。そのように私には見える。

それでは自分はどうなのか。先生方のような「達人」ではなく、「普通無識の徒」である自分はどうこの関係を見たらいいのか。若い頃には達人に憧れ、なんとかそこに近づきたいと思っていた。しかし老いを感じようになつたいまでは、「普通無識の徒」として開き直りたいと思うようになった。

以前の論文で私は、西田が禅

を哲学的方法として用いていることを批判している。その批判には、「普通無識の徒」を立ち位置にする覚悟ができていなかったことが反映しているところがある。いまは、西田は禅を出発点に置いたことで大きな可能性を掘り起こしたと考えるようになった。振り返ってみれば、禅と哲学の関係を考えることは積年の宿題であった。宿題であるからには嫌でもやらないわけにはいかない。

西田哲学会令和三年度 秋の定例理事会報告

二〇二二年十月三十一日(日)に、オンラインにて理事会が開催された。概要は以下の通りである。

(一) 第二十四年次大会について
日程は令和四(二〇二二)年七月二十三日(土)～二十四日(日)、会場は東京大学駒場キャンパスとすることが確認された。

二十三日(土) 午後開催予定の講演者二名については、候補者を田島照久氏、山極壽一氏とすることが決定された。また、二十四日(日) 午後開催され

るシンポジウムのパネリストおよび司会三名については、候補者を板橋勇仁氏【司会兼提題者】、鑄物美佳氏・安部浩氏【以上提題者候補】とすることが決定された。また、シンポジウムのテーマについても、「純粹経験」をめぐるものとする事が確認された上で、板橋氏に一任することが承認された。

(二) 令和五(二〇二三)年度
年次大会の開催時期と国際シンポジウムについて
事務局から「二〇二三年十月

には石川県で国民文化祭が開催されることになっており、同年七月に国際シンポジウムをも開催することは難しいと、かほく市は考えている」という報告があった。国際シンポジウムをいつ実施するかも含め、今後の年次大会の実施スケジュールについては継続審議となった。国際シンポジウムについては、ワーキンググループを組織して具体化していくことが確認された。

(三) 上田閑照基金について
委員は現行委員(秋富、上原、白井、水野、美濃部)のまま、もう一期引き続き運営していくことが承認された。なお、代表については新会長の美濃部理事に引き継がれる。

また、助成の申請書に関しては、現今の社会情勢を考慮すればこれまでどおり性別の記入を求めるとは問題であるという意見が出され、記入欄を削除することが決定された。助成に関する細目を整えたうえで、HP上で募集を開始することが確認された。

(四) 編集委員会より

『会報』第十九号編集状況については、十一月発行を目指して編集していくことが確認された。また、『年報』第十九号については、刊行から一年後の電子化(PDF化)ならびに公開へ向けて対応することが確認された。更に、編集補佐員は編集委員会で候補者を立てて決定し、電子化担当補佐員は第十八号も引き続き森野雄介氏に依頼することが確認された。

(五) 事務局より

新たに一名の入会が承認された。また、事務局委託費については、従来通りの運営を行うことが確認された。

(飯島孝良)

令和四年度第一回理事会

●第二十一回年次大会について
開催日程や会場について現在

協議中である旨が会長より報告された。理事よりいくつかの提案がなされたが、審議継続となった。

●編集委員会報告

秋富副委員長より、年報十九号が八月一日に発行される事が報告された。

●事務局報告

(一) 令和三年度決算案および令和四年度予算案が提示され、承認された。

(二) 四名の入会および四名の退会が承認された。また、三名の会員の逝去が報告された。

●学会の財政状況について

決算案・予算案の審議の後、長年にわたり繰越金が減少傾向にあることが事務局より報告された。報告を受け、財政状況の改善策が協議された。

●上田閑照基金の運用について

大橋理事より、上田基金を使用した西田・西谷シンポジウム/ワークショップが日独文化研究所との共催で令和四年十月二十二～二十三日に予定されていることが報告された。

●その他

幹事会より、大会における研究発表の形態や会員連絡体制の電子化に関して提案がなされ

た。特に、シンポジウムとは別に企画者グループが個別にテーマを設定できるパネル発表の場を設けることが提案され、実現に向けた課題が協議された。

(猪ノ原次郎)

上田閑照基金について

「西田哲学会上田閑照基金」の運用が昨年から開始されました。HPにその「規約」と「運用方針」、各種申請書式が掲載されていますので、ぜひご利用ください。研究旅費や出版助成について、若手の方々のみならず、定年後の先生方も念頭に置いて運用しております。ご質問等がある場合は遠慮なく事務局にお問い合わせください。

現在は、出版助成一件についての検討が進行中です。西田哲学研究および広く日本哲学研究の推進と発展を願われた上田先生のご遺志を継いで有効に活用させていただきますと思っています。

(美濃部仁)

西田哲学研究会のご案内

・西田哲学研究会「於京都」
 京都の西田哲学研究会は、前年度の再開以降引き続きオンラインで会合を実施しています。

従来通り年に四回のペースで、現在は、「一般者の自覚的体系」の終盤に差しかかっています。海外を含め遠方から多数の参加をいただいている一方、常連で参加して下さっていた一部の方に参加していただけないことを残念かつ申し訳なく思いながら、ハイフレックス方式での実施可能性を探っているところです。本件についてのお問い合わせは、秋富 (akifumi@rit.ac.jp) までお寄せ下さい。

・寸心読書会「於石川県西田幾多郎記念哲学館」

寸心読書会は一九四七年に始まった哲学館で最も伝統のある事業です。例年、年間十回程の予定で西田や京都学派の思想家の著作を読んでいます。二〇二二年度は、金沢大学の山本英輔先生に講師をお願いして、『西田幾多郎講演集』に収録された講演「実在と生と論理」

を読んでいます。年明け三月頃に新たに年間の受講の申込を受け付ける予定です。講読範囲、受講方法、受講料等、詳細につきましては、哲学館ウェブサイトに等をご確認ください。

(中嶋優太)

『西田氏実在論及倫理学』の所蔵確認について

『善の研究』は、四高での講義録や論文など、複数のテキストをもとに編まれています。その『善の研究』の原本のひとつである『西田氏実在論及倫理学』はその所在が分からなくなっていました。石川県西田幾多郎記念哲学館の館長浅見洋と専門員中嶋優太が調査を行い、金沢大学図書館に所蔵されていることを確認しました。

『善の研究』の第二編、第三編は一九〇六年九月から西田が四高で行った倫理講義の講義ノートを生徒たちが印刷したもののがもとになったとされています。さらに一九〇七年九月頃に再び印刷されたと考えられているのが『西田氏実在論及倫理学』です。この『西田氏実在論及倫理学』については、下村寅太郎

などが言及しており、その存在は知られていましたが所蔵の情報はありませんでした。これまでにこのテキストの現物を実際に確認したと考えられる最後の研究は茅野良男「西田幾多郎の初期の思索をめぐって―資料篇の解説に代えて―」『西田哲学―新資料と研究への手引き―』ミネルヴァ書房、一九八七年で、それ以降、このテキストを実際に確認した研究者はいませんでした。

(浅見洋・中嶋優太)

「年次大会」における口頭発表の応募について

第二十一回年次大会(二〇二三年七月開催)の口頭発表者(日本語または英語)を公募します。発表希望者は、二〇二三年三月末までに、八〇〇字程度

の要旨と簡単な経歴・業績表を添えて事務局にお申し込みください。

『西田哲学会年報』掲載論文の公募について

『年報』巻末の応募要領にしたがってご投稿ください。皆さんの応募をお待ちしております。なお次の第二十一号掲載分は、編集の都合上、令和五(二〇二三)年十月末をもって一つの区切りといたしますのでご了承ください。応募にあたっては、ホームページに掲載の投稿規程と執筆要項をご確認下さい。

編集後記

今年、猛暑の二日間、東京大学・駒場で二年ぶりに対面での年次大会が実現。実際はハイフレックスでしたもので、オンラインで参加された方も多数いました。記憶に残る、会場での気迫に満ちた議論という過去の大会のイメージとは異なり、会場参加者が少なめであったためでしょう

か、穏やかに質疑が繰り返されたという印象です。とにかく、一部の皆様と会場でお目にかかれたのは何よりでした。開催にご尽力下さった東京大学の張先生にお礼申し上げます。

学会の世代交代を強く感じつつ、今後の新たな形での充実した学会活動を楽しみにしております。

(編集委員長 上原麻有子)